

復活した麒麟獅子舞を後世へ

——故郷との交流を通じた島文化の伝承

利尻麒麟獅子舞う会 西谷 榮治

—団体名— 利尻麒麟獅子舞う会

—事業名— 利尻麒麟獅子復活二〇年記念里帰り奉納舞

長い眠りから目覚めた

利尻麒麟獅子

二〇〇四年六月二〇日、利尻町仙法志^{せんぽうし}字長浜にある長浜神社で麒麟獅子舞が執り行なわれた。一九〇八年に麒麟獅子舞が日本遺産「麒麟のまち」鳥取・秋里^{あきさと}から利尻島に渡って以来、ほぼ百年ぶりに目覚めたのだ。以来、コロナ禍で三年間の中止もあったが、六月二〇日に必ず長浜神社で舞い続けられている。

鳥取からの利尻島への移住は一八八七年頃から始まった。九二年の『利尻郡各村戸長役場明治二五年分登記目録』によると、島外移住者一六四戸のうち鳥取からは六戸だった。また、一九一八年の島内の鬼脇村^{おにわき}の住民の出身地別戸数は青森二五〇戸、秋田一七二戸、北海道一四三戸、鳥取九〇戸であった。これは鬼脇村（集落）だけの数値なので、島内全体の各集落における鳥取からの移住戸数は、百戸を超えてい

たと十分に考えられる。

当時の利尻島は鯨漁^{じやうりょ}と昆布漁が盛んだったと思われがちだが、鯨漁獲高は一八九七年を最盛期として徐々に下がっていく。そのなかで鬼脇村では新たに蟹缶詰業が立ち上がった。一九一〇年頃の鬼脇村に蟹缶詰工場は二〇カ所あり、二三年の「宗谷支庁移住成功者調査」には、利尻島の成功者五人のうち三人の「蟹缶の親方」は鳥取からの移住者である。

麒麟獅子が渡った仙法志長浜には鳥



仙法志地区の長浜神社で舞われた利尻麒麟獅子(2023年)。

取市里仁^{さとに}や秋里からの移住者が集まっていた。そのきっかけは一八八九年頃に同地に渡った里仁の親子である。その後、鯀と昆布を買い付けして成功した評判が鳥取で広がり、一八九四年に二五名が固まって仙法志長浜に渡って

いる。

仙法志長浜には、かつての麒麟獅子用具が木箱に入って残されていた。この用具が鳥取から渡ってきたのは一九〇八年で、鳥取からの移住者が婚姻のため帰省し、利尻島に戻る際に持ち込んだといわれている。鯀漁

獲高の下降により、豊かな財産を持って誇らしく鳥取に戻ることではできず、やむを得ず利尻島定住を決めたのではないだろうか。鳥取から遠く一三〇〇キロメートルほど離れた日本列島の最北端の島で生きていく、その心の支えとして故郷の麒麟獅子を持ってきたのだろうと想像する。

長浜神社は「豊受稻荷大明神」を祀る神社だが、建立者は鳥取から移住した鯀建網漁場経営者である。こ

こは鳥取の人たちが集う場であったとされ、秋里から渡ってきた人が同郷の人たちに麒麟獅子舞を教え、教わった人により一九一八年に一度だけ舞われたといわれている。舞を教えた秋里の人は、まるで生きている獅子のようであったと、子孫に語り伝えている。

復活二〇年を記念した 秋里での里帰り奉納舞

二〇〇一年、利尻島でかつて麒麟獅子舞が舞われたという情報が秋里に伝わり、途絶えてしまった麒麟獅子舞をぜひ復活してほしいとの連絡が現地から利尻に届いた。これを受け、長浜の若い人たちが〇三年に「利尻麒麟獅子舞う会」を立ち上げ、見様見真似で舞の習得を始めた。同年八月、秋里の「荒木三嶋神社麒麟獅子保存会」が来島、翌年一月に利尻麒麟獅子舞う会が現地を訪問するなど、交流を通して麒麟獅子

舞の復活につなげていった。

二〇〇四年六月二〇日の復活以後、荒木三嶋神社保存会からは、これから先も舞い続けるならば、麒麟獅子を先導するあやし役の狸々しじょう、麒麟獅子の頭、尾、太鼓、鉦かね、笛の六つの役割を舞人

の誰もができるようにすること、鳥取では麒麟獅子舞は必ず一カ所、手本とは異なる舞い方をするという習わしがあるのです、どこかで利尻島ならではの舞にすべきといわれていた。

特に利尻島ならではの舞については、

何度も話し合いが行なわれた。荒木三嶋神社のゆつくりした優雅な麒麟獅子舞を利尻の自然の雄大さ・穏やかさとして継承し、逆に北の島の風と波の荒々しさを麒麟獅子舞の最後にすることで、利尻ならではの風土を表す舞とすることとした。具体的にどう舞うか、それにあわせた太鼓、鉦、笛の囃子もどうするのかなどにも時間を費やした。同時に舞人が麒麟獅子舞の複数の役割を担うことができるように、配役を代えながら練

習に取り組んだ。こうして二〇〇八年六月二〇日に新しい麒麟獅子舞が奉納された。

二〇二三年、「利尻麒麟獅子復活二〇年記念里帰り奉納舞」のため、「離島人材育成基金」を活用して荒木三嶋神社例大祭にあわせて、舞人七人が鳥取を訪れた。一五年以来、八年ぶりの訪問だった。現地では、四月九日の同神社春季大祭で利尻麒麟獅子舞を奉納した後、武者行列や大御神輿みみかきからなる御幸みゆき行列と一緒に集落内を練り歩き、神社に戻ってから再び奉納舞を行なった。

例大祭後の交流会では、秋里と利尻それぞれの麒麟獅子舞の伝承に向け、それぞれとなったことなどを語り合った。刺激となったことなどを語り合った。秋里では新しく移り住む人たちをどのように麒麟獅子舞に巻き込むのか、利尻では仙法志地区全体の若い世代が少ないうちなか利尻麒麟獅子舞う会を今後どう伝承すべきか、という課題についても意見交換がなされた。交流会は、「両



荒木三嶋神社にて、鳥取・利尻の麒麟獅子保存会の面々。

離島人材育成基金助成事業 運営委員より

北海道には、明治期以降日本各地から移住された方々が持ち込まれた民俗が、多々見られます。今回、助成いたしました利尻町仙法志字長浜に伝わる麒麟獅子舞も、そうした民俗の一つだと思います。ただし、一旦途絶えた民俗芸能が住民有志により復興され、20年の歴史を重ねているという事例は、そう多くはないのではないのでしょうか。数々のご苦勞を、さまざまな工夫で乗り越えられ、今日まで歳月を重ねてこられた地域の方々の姿に感動いたしました。

現在、麒麟獅子舞は、その故地である鳥取市秋里にある荒木三嶋神社の麒麟獅子舞保存会の方々や、重要無形文化財保持者(人間国宝)の津村禮次郎シテ方観世流能楽師一行とのコラボレーションが展開され、「新しい伝統」として地域の発展に寄与しています。この長浜地区における活動は、隣接する地域に刺激を与え、民俗芸能による、地域おこしの動きが広がりつつあるようにも見受けられました。素晴らしい事例を拝見させていただいたと考えます。(運営委員・共立女子大学、順天堂大学兼任講師 土屋 久)

西谷 榮治 (にしや えいじ)

利尻麒麟獅子舞う会 篠笛と事務担当。1954年利尻島生まれ。2015年3月利尻町立博物館定年退職。以後、インターネットなどで利尻島の今と歴史情報を発信している。

地区ともに麒麟獅子舞が地域の文化を創っていることを自覚し、職業などが違っていても舞人同士の連携を強めること、「楽しく面白い会であることを基本に、地域の若い人たちとつながっていくこと」「これからも相互交流を続けていくこと」などを確認する有意義な場となった。

島の宝として後世へ

上述の通り二〇二三年は、四月に秋里にて利尻麒麟獅子の里帰り奉納舞を行なったほか、六月には秋里の荒木三嶋神社の麒麟獅子が来島し、長浜神社で奉納舞が行なわれた。当日は、重要無形文化財保持者でシテ方観世流の能楽師・津村禮次郎氏と「利尻麒麟獅子舞う会」が能と獅子舞を合わせた創作「利尻」を共演、地域住民をはじめ約二〇〇人が神社に集まり賑わった。

一年となった。鳥取での麒麟獅子舞は、さいやく災厄を祓い豊穰を祈願するといわれているが、利尻麒麟獅子は、災厄を祓うとともに、海からの恵みや島人たちと鳥取とのつながりによる幸せを祈願している。利尻麒麟獅子舞の歴史と文化が地域の心を潤わせ、島からの風や波に乗って島外にも広がり、さらに人々を惹きつける島になることを願って、これからも舞い続けたい。